

TAKE FREE

2M+ | vol. 09

北海道教育大学岩見沢校 卒業生へのインタビュー



+ 絵画造形教室講師

秋元 さなえ AKIMOTO SANAE

Topics

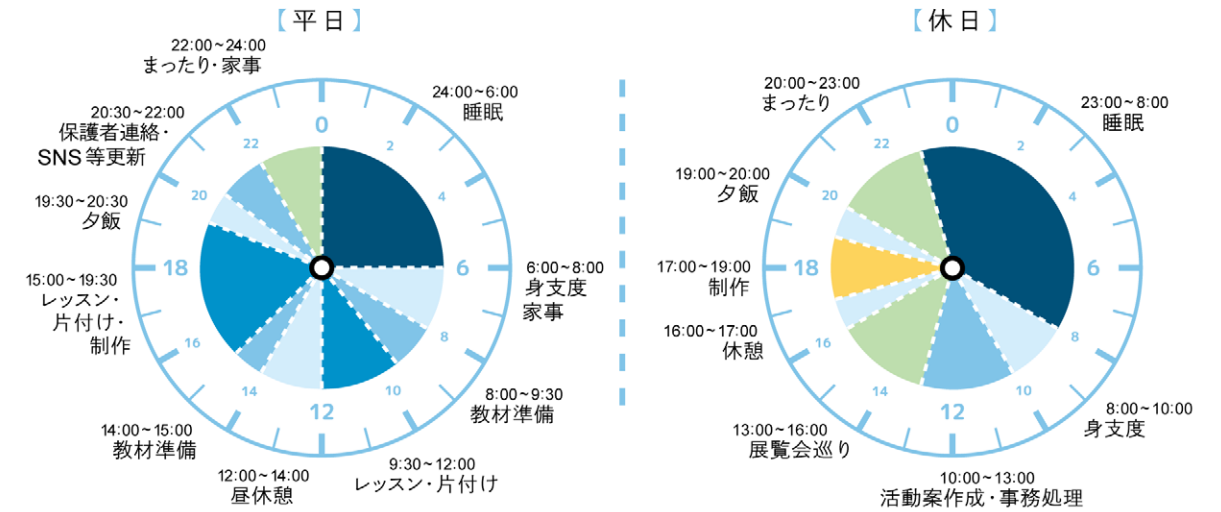
「アトリエとりむしさかな」について
空間造形研究室で学んだフィールドワーク
仕事と制作と生活
生きることと作ること
2025 年以降の展望
岩教からその先へ

ZAWA+について

2020年より、新たに始まった i-BOX のシリーズ企画「ZAWA+」。
本展では岩見沢（ZAWA）から飛び立った、卒業生のその後と現在（＋）
をご紹介します。岩見沢校が現在の芸術・スポーツを学ぶ大学に形を変えてから 10 年以上が経過しました。これまでに岩見沢の地を巣立った卒業生たちは、社会経験を積みながら近年、活躍の幅を広げつつあります。教員、会社員、クリエイター…様々な進路に進んだ卒業生たちは、今一体何を考え、何を作っているのでしょうか？「ZAWA+」では、社会とかかわりながら、研鑽し続ける卒業生の皆様をご紹介します。

HITOTONARI SPACE

Q.1 | アキモトさんの一日



Q.2 | アキモトさんの5カジョウ

- + 体が資本
- + 何年かかってもやる
- + 結局は人と人との関わり
- + 作品制作は素直にへんてこに！
- + 家では気を抜く

Q.3 | 現在のお仕事



自身の拠点「アトリエとりむしさかな」で、8クラス・43名の子どもたちと創作活動をしています。



最近の外部講師の仕事「ジュニア・アートクラブ」のモノタイプ版画の成果物。道立近代美術館のロビーに贅沢に飾っていただきました！



vol. 09

+ 絵画造形教室講師

あきもと

秋元 さなえ

秋元さなえ37歳。北海道江別市生まれ。三人の姉たちは、絵や音楽やアニメ声優大好きで、根っからインドアな家庭の影響を強く受けて育つ。高校は札幌厚別高等学校の芸術類型美術コースに進学。運動部よりも活動日の多い美術部で部長を務め、絵画制作にとっりの青春時代を過ごす。就職難の時流を心配した美術部顧問の勧めで、それまで興味のなかった大学進学を決定。北海道教育大学岩見沢校美術コース（当時）に進学したが、デッサン等の受験対策の反動で、絵が思うように描けなくなる。

進学後は空間造形研究室（当時）に所属し、坂巻正美教授指導のもと、インスタレーション、アースワーク、パフォーマンス、フィールドワークやリサーチなどを手がかりとした現代美術の作品制作を学び、高校時代の絵画制作から手法を大きく変え、素材や技法に制限なく表現する楽しさを知る。

卒業後は絵画造形教室の講師として従事しながら、独立に向けた機運を伺い、2016年に「アトリエとりむしさかな」を開設。また、作家活動も並行して続けており、2018年から2023年にかけてTEMPORARY SPACE（札幌市）にて「ランド」シリーズ（三部作）を発表。近年では札幌市立栄西小学校での滞在制作「おとどけアート」にも参加している。

2025年には「アトリエとりむしさかな 大きいアトリエ」も開設し、地域の子どもたちとともに、自由に表現できる場を創っている。好きなものは、コーヒー・春・うすた京介。



「アートを教える、というよりは子どもの発達に合った創作活動をしています。授業内容は、これまで勤めてきた絵画教室や放課後等デイサービスで学んだことをベースにして、子どものやれることや、学校ではやれないだろうな、ということをかいつまみながら考えています。

—今日の様子を拝見させていただいて、かなりアットホームだな、と感じました。

アットホームなのかな？何してもいい場所っぽくはあるかもしれないですね。保護者さんにも、アートを教える場所です、というよりは、子供の感性を受けとめられる居場所として思ってもらえるといいな、という思いがあります。

—このアトリエはどんな子どもたちが集まって来るんですか？子どもを預かる場所なんですか、それとも子どもたちに絵を教えるための場所なんですか？



上段【とりむしさかな 小さいアトリエ】
北海道江別市大麻東町 13-52

下段【とりむしさかな 大きいアトリエ】
江別市大麻東町 13-48 SROG 内 201

「アトリエとりむしさかな」について

—教室お疲れさまでした。秋元さんも生徒さんも、皆さん楽しそうでした。

ふふふ、楽しいですよ。この教室には江別、札幌、岩見沢から幼児・小学生・中学生の子どもたちが通ってくれています。

ここは基本的に「こういうものを作りなさい」という場所ではありません。毎回テーマはあるのですが、できた作品を良いとか悪いとか、こちらでは言いません。その日何が起こったかだけはお家の人に伝えまうし、作った本人が自慢してきたらそれはすごいことを考えたね、みたいに言います。

—レッスン内容は秋元さんが独自で考えているのですか？どのような意図で組んでいるのでしょうか。



秋元さんが実際にフィールドワークとして、各地を訪れている様子



空間造形研究室で学んだフィールドワーク

―学生時代の話についてもぜひお聞かせください。空間造形研究室※1では、名だたる先輩として秋元さんの存在があります。

うくん、14年も前なので記憶も薄くなっていますが：ゼミではいつも学外でプロジェクトをやっている人や、常に展覧会を3つ抱えているような人たちに囲まれて、なかなかしんどかった記憶があります。すべきことが見えている人たちを間近に見ていて『私はいったい何をやってたらいんだらう』と置いていたような：。ちよっと苦い思い出ですね。

―担当教員の坂巻先生とのエピソードを教えてください。

ゼミでは週に1回集まって文献を読んだり、それぞれの活動の進捗を話して対話したりしていました。特に記憶に残っているのは、進路相談



教室の外で活動している様子



大麻銀座商店街

ここに来る子たちは、お家の人がインターネットで絵画教室を探したり、Instagramで見つけて、というパターンが一番多いです。きっかけは保護者さんですが、ここをなかなか大事な場所だな、と、子どもから必要としてくれた時に継続して通ってくれることが多いです。

毎回活動報告を写真と一緒に送っているんですが、そこがメインとっておられる保護者さんもいらっしやいます。子どもが学校や家庭では見せない顔をしている、楽しそうにしている、不登校の子が安心して通っている、とかそういうのを期待している保護者さんも一定数います。子どもたちの中には、私のことを大人なんだけど大人じゃない、友だちみたいな存在のように思ってくれている子もいて、そういう地域のひとつの機能や場所であれたらいいな、とは思っています。

―地域の方からの反響などはありますか？

をしたときに『いのちは一つしかないから、本当にしたいことをしなさい』と言ってくれたことです。それで、絵画教室で働く道を選びました。

―秋元さんの作品はフィールドワーク※2がもとになっているイメージがあります。在学時の坂巻先生の授業がきっかけなんでしょうか。

そうですね。坂巻先生の授業では、フィールドワークをしにいろんなところへ行きました。私の地元である江別にも行ったんですが、自分の知っているところを改めて歩く面白くて、作品のテーマにできるんだ、と驚きました。フィールドワークは、自分で始めたことではないですが、自分に合っているなと思って、在学時から始まり今も続けています。なんでフィールドワークに行くかは：やはり違うものを見たい、とか、自然に自分を重ねている、からでしょうか。歩くって体験だと思うんですが、体験から心が変わることの魅力を感じました。

アトリエは大麻銀座商店街の一角にあるのですが、商店街の人から『ここができてから子どもが通るようになったのは賑わいとしていいよね。』と言っていたいたことがあります。たまにアトリエの外に出て活動しているときに、生徒さんじゃない子どもたちがわーっと集まってきて、一緒に活動することがあります。そういうこともあるから、いい感触を持って街に受け入れられているのかな、という気がしています。

アトリエに来る子は、同じ商店街内の塾や学童にも在籍している子もいて：ここは商店街そのものがサードプレイスのようになっています。

商店街の中通りは歩行者天国になっているのですが、道にチョークでお絵描きをしていると話しかけてくれる人もいますし、そこで興味を持って絵画教室に入会してくれるご家庭もあります。この活動がアトリエの中だけでなく、地域の一部分みたいな感じでやれていたらいいな、という気持ちがあります。

―卒業制作ではどんな作品を作りましたか？

江別で、川のないところ、もともと川があったところ、川の名前にまつわる地域名が残っているところで釣りのパフォーマンスをしたんです。街中でやっているから、通りかかった人が話しかけてくれて『そういえば昔このへんに川あって、釣りしたわ。』なんて話しました。そういう一期一会の出会いがありましたね。



釣りのパフォーマンスを行っている様子

※1. 現在の現代美術・空間表現研究室。

※2. 実際に対象となる地域や社会に足を運び、直接観察やインタビューなどを行う研究手法のこと。



外部講師として福祉村で働いている様子 写真提供：岩見沢福祉村

仕事と制作と生活

「アトリエ活動以外のお仕事についてお聞きたいです。」

外部講師の仕事を主に2か所、他には放課後児童クラブの支援員としても働いています。

「いろいろな場所で絵画教室を行っているんですね。お休みはどうしていますか？」

仕事の休みは自分である程度コントロールできています。アトリエのレッスンを休みにすれば、連休を取ってどこかに行くこともできますし、展覧会が近いので今日は休講で…と言っても理解してもらえます。会社勤めだったらいきなりそんなことは難しいですね。個人事業主としてやっているからこそできる働き方だと思っています。でも、結果的に休みは年に35日くらいになってしまい、体力的に少し厳しくなってきたなとは思っています。

絵のこととか作品のことを考えない休みは存在するの？っていうと、ないかもしれない。もちろん疲れたら強制的にお休みにしますが、美術鑑賞が好きなので、趣味で休みの日にも展覧会を観に行ったりしちゃいます。制作とプライベートに関しては、境界線はあってないようなものですね。

卒業制作

タイトル：「川の魚」(2011年)
写真撮影：山岸靖司（写真家）

秋元の地元である北海道江別市に流れる川と旧河川をテーマとした、行為と記録の作品。作家が川跡で釣りの行為をすることで、今とは異なる江別の姿を、パフォーマンスに遭遇した人にも感じさせた。展示には、使用した釣竿とオモリ、記録冊子を中心に設置。

写真左：岩見沢会場（そらち炭鉱の記憶マネジメントセンター）での展示の様子
写真下：札幌会場（札幌市資料館）での展示の様子



「アトリエとりむしかな」ができて、「自身の制作で変わったことはありませんか？」

卒業したての2014年頃までは、まだアトリエもなくて、作りたいのに作る場所がなく、小さい作品しか作れない、ストレスの多い時期でした。その後アトリエを借りて、やっと大きいものを作れるようになった時に、作品が大きく変化しました。例えば大きな絵や3メートルの織物を作ったり、金属を素材にした作品を作れるようになりました。時間をたっぷりかけて、サイズも素材も制限なく制作できるようになりましたね。

「アトリエとりむしかなや他の仕事と、自分の制作のバランスはいかがですか？」

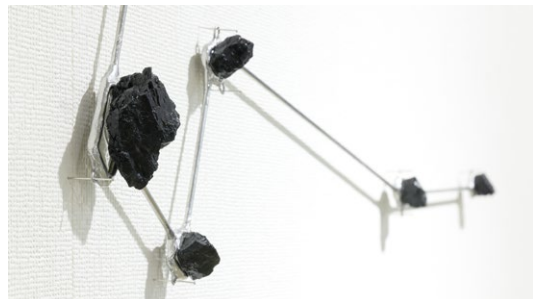
仕事と制作は、互いにすごく影響を与えていると思います。仕事では、講師が制作しているから信頼してくれる、という生徒さんや保護者さん多いんじゃないかな。

自分の制作では、煮詰まった時に『〇〇ちゃんだったらこうするだろうな』とか、私とは違うアプローチをする子どもの顔が浮かぶようになりました。このアトリエを始めて、自分の突破口が増えたな、という実感があります。実際に子どもたちが展示を見に来てくれて、自分が悩んでいたことについて『あれはこうで、こうなんですよ！』と言い当てられて『そうだよ!!』とか『あなたは分かってくれると思ってた!!』みたいなやり取りが生まれました。間接的にですが、一人では作れない、そんなことを考えています。

「制作の時間はどのくらい取られていますか？」

1つの制作に1年ぐらしかけるから、毎日制作しているわけではないですね。外部講師業や、アトリエのレッスンにはそれぞれのスケジュールがあるので、それに合わせて年間予定を4月くらいに立ててしまします。個展があるときは先にそこだけ





※ 5. 2023 年 10 月に岩見沢市絵画ホール・松島正幸記念館にて開催されたグループ展示「第 4 回ホープ展 歩くみちの記憶」内で発表した作品。
上段、下段左写真撮影：山岸靖司（写真家）

い、と既存作品をまとめた ZINE
※ 4 を買い求められる方も結構多い
です。素材や技法のことはそんなに
聞かれなかったりします。

ー言われてみると、秋元さんの作品
はその時々によって石炭や日光写
真、アクリル画など素材や技法が異
なります。フィールドワークから着
想を得て素材を選んでいるのでしょ
うか。

例えを挙げると、2023 年度
に岩見沢市絵画ホール・松島正幸記
念館で発表した「地図の星々」※ 5 も、
テーマが「岩見沢」ということだっ
たので、プランはないままに岩見沢
にあるズリ山※ 6 登山にまず行きま
した。そこで石炭を拾って、岩見沢
の地図を眺めて、地図上の自分が関
わった場所に点打ちしたものを線で
繋いでみたら、なんかコレ今までの
生きてきた道のりが星座みたいに見
える…そこに石炭を置いたら、なん
かちょっとドキドキする！作品にな
るかも！みたいな。

高校は美術コースのある札幌厚別
高校に進学して油彩画を描いていた
から、絵の方が楽って思うときもあ
ります。イメージを伝えたい時は、
絵画は効果的だな、と思っています。
絵は見どころをいっぱい作れるのも
いいですね。

一方で、体験を生々しく伝えたい
な、という時はフィールドワークで
拾ったモノなどを使います。ただ、
どうやって体験を伝えたいいん
だろ、というジレンマは毎回ありま
す。

ーフィールドワークもそうですが、
作品に一貫しているテーマみたい
なものはありますか？

テーマかあ…うん…なんでしょ
うね。普段生活していて『目の前に
見えている世界で生きていくのは嫌
だな、見えてないものを見たいな』
と思った時に制作が始まる…かも
しれません。

たとえば、仕事が上手くなってな
かったときの自分の状況を、新篠津

※ 6. 石炭採炭時に排出される石炭成分が微量・または石炭ではない石などを集積した山のこと。
岩見沢市では万字地区に階段が整備され頂上まで登ることができるズリ山が存在する。



※ 3. 岩見沢市にある NPO 法人炭鉱の記憶推進事業団
が運営するインフォメーションセンター。空知管内の
炭鉱遺産を中心に、産炭地域や室蘭・小樽などを含ん
だ「炭鉄港」の振興・活性化を担う。
写真右は秋元さんが住友炭別炭鉱のガイドツアーをし
ている様子



スケジュールを空けておいて集中す
るようにしています。

1 日の中で言うなら、午前中に家
のことや事務処理をしたら、アトリ
エに行って 2 時間くらい制作して、
お昼を食べて、制作して、夜ご飯を
食べて、制作して…夜中の 2 時くら
いに帰って寝る…みたいな生活で
す。自宅ではきちんと休みたいので
制作はアトリエでしています。

ー結構過密スケジュールですね。
展示前とかは確かに過密ですね。
でも、やれることしかやらないです。
無理だな、と思ったら、今回はこ
まににして、続きは次の展覧会でや
ろう、みたいに思っています。特に
最近は人に頼るようになりました
ね。昔だったらお金がないから自分
で頑張ってたってことを、外注
するようになってきました。自分で
どうしてもやりたいことはやって、
そうじゃないところは人の力を借り
る。時間がないから、そういう潔さ
みたいなのは生まれましたね。

生きることと作ること

ー秋元さんの展示には、美術界隈以
外の方も沢山いらっしゃる、と聞き
及んでいます。今までの活動で知り
合った方とかでしょうか？

そうですね！たとえば、そらち炭
鉱の記憶マネジメントセンター※ 3
に勤めていた頃のお客さんは、も
と地図や歴史が好きという方々な
ので、単純に興味趣向が合って展示
を観に来てくれます（笑）。

あとは、『秋元さん今回はどんな
ふうに変ったんですか』『みたい
な、今回の作品でお前はどの成長したん
だ、みたいなのところを観に来てく
れる方が多いかもしれません。友達だ
から話をしに行きたいとかじゃなく
て、この人の周りの環境はどう変化
したのか、こういう体験をしたのか、
というのを観に来てる感じがありま
す。

だから、今回の展示作品を観るに
は関連した前作も観ないと分からな



※ 4. 自主出版の小冊子のことをさす。秋元さんはこれまでに 4 冊の冊子を制作している。



写真右：集中講義にて、学生が地図をみて自分の「リバーネーム」を考えている時の様子
写真左：集中講義にて、学生と実際に川の周辺を探索している様子



2025年以降の展望

— 今年 は現代美術・空間表現研究室の集中講義を担当されることになりました。どんな学びを考えていますか？

学生には、作ることより体験に重きを置いて臨んでほしいですね。自身が日々制作の中で感じている「素材に選ばれる」という体験をしてほしいと考えています。自分が選び取ってカタチを決めて作るのではなく、何かの縁で出会って、選ばれて、そこからカタチが生まれたり、制作が続いていく…。なかなか難しいかもしれませんが、その断片が見える授業になったらいいなと思って、私が在学時に授業でやった、鮭の皮を剥がして何かを作るという課題を皆さんにも課そうかなと考えています。

千歳の「サケのふるさと千歳水族館」まで行って、職員の方が生け捕りにしてくれた鮭の皮を剥きます。

— 他人にも、自分の地元やゆかりのある場所との関係を考えるように

凄いいショッキングだったという人もいたから、学生さんにとって楽しいかどうかはわかりません…。

鮭の他にもう一つ、自分のリバーネームを考えると課題をやってみらおうと考えています。自分のゆかりのある場所の…例えば石狩川とか、豊平川とか…それを「秋元・石狩川・さなえ」みたいな感じでミドルネームにして、どうしてその名前にしたかを語ってもらいます。

冬に行ったA・Sプランニングさんの「おとどけアート※8」の時にも、学校の先生方にリバーネームを考えていただき、インタビュを撮らせていただきました。春から夏にかけて、先生方が仰ったそれぞれの場所に行ってどんな場所か見て、記録をとっています。これらの記録を作品の形にして、岩見沢駅で展示できれば良いなと思っています。



秋元さなえ展「ランドマーク」 会場：2023年3月21日～26日 会場：TEMPORARY SPACE 写真撮影：山岸靖司（写真家）
札幌で開催された秋元さんの個展の様子。写真中央の作品は三日月湖をフィールドワークして着想を得た作品

村の三日月湖※7に重ねていた時期があります。

歴史を調べて、なんで水は滞ってしまっただろう？と考えました。でも実際に行ってみたら、外界から寸断されているようなネガティブな場所ではなく、水が滞っているからこそ周辺の農地が成立している…ということが分かりました。一貫しているのは、特定の風景や地形に、その時の自分の状況や心境を重ねて見ていること、フィールドワークを経て体験した認識の変化を再び自己に落とし込んでいくことでしょいか。作品を通して、自分を変えていきたいんです。

— 今回、ZAWA+では「絵画造形教室講師」として秋元さんを取り上げましたが、実際のところは「アーティスト」といっても差し支えない気がします。

自分ではあんまりアーティストとは意識していませんね。過去に別のインタビューで、秋元さんはいつか



らアーティストになりたいと思っていましたか？と聞かれて、『一回もないですね』と答えました（笑）。制作はしたいけど作品はあまり手放したくないと思っているので職業にはできないなと考えています。一方で、私を一人のアーティストとして背中を押してくれる方々もいるので、そういう想いに応えたいという気持ちも持っています。

私にとって作品やアトリエの場を作ることはライフワークですね。これを作る自分になって良かったな、みたいなことを継続していきたい。そういうところもひっくり返ると、自分はアーティストというよりは絵画造形教室講師と名乗るのかな、と思っています。

※7. 河川の蛇行部分が時間をかけて土砂が堆積し、やがて河川本体から切り離され、三日月状の湖が生まれることがある。洪水や人工的な河川工事などで発生する場合もある。

岩教からその先へ



※ 8. (一社) AIS プランニングが行う、札幌市内小学校へのアーティスト派遣事業「アーティスト・イン・スクール」事業の一部。
秋元さんは札幌市立栄西小学校へ派遣された。 写真提供：おとどけアート実行委員会

促していますが、意図的なのでは
うか。

人には、どこかで自分のことを
知ってほしいという欲求があると思
うんです。「おとどけアート」以前
から、展覧会の在廊中に、私の作品
を見たお客さんが「自身の昔話を教
えてくれるということがたびたびあ
りました。最初は意図していたわけ
ではありませんが、今はそのやりと
りが作品に尾ひれを付けるようで面
白く、作品の次の展開に繋がってい
くこともあるので重要だと思ってい
ます。

―秋元さんが将来的にやりたい、と
いうことはありますか？

うーん、アトリエと外部講師の仕
事をメインにしていきたい、という
のはあります。外部との繋がりは続
けつつ、このアトリエから発信する
動きをもうちょっと力を入れてやり
たいかな、と思います。

―やはりメインは江別市での活動に

なりそうですね。

そうですね、地元ですし、拠点で
すからね。江別のことをベースにし
て制作をしているので、作品を作る
なら江別に居続けるんだらうな、と
思っています。たまに目上の方か
ら『もっと外に出ないとダメ』と
か『もっと広い世界を見る』とか言
われてしまうこともあります。視野
を広げる良さももちろんわかります
が、一点を深める良さだって別にあ
るじゃん、と思っています(笑)。



「おとどけアート」にて、秋元さんが制作した“リバーネーム”についての映像作品を上映している様子 写真提供：おとどけアート実行委員会

―卒業から10年以上が経過しまし
た。長く美術に携わることで思っ
とはありますか？

“制作ができない時期” っである
けれど、その間も自分の中でテーマ
が続いていたりすると思うから、
“できない時期”も活動が続いていると
思っ、作ることをやめないでほし
いな、と思います。大学を卒業した
ら、大多数の人が作ることをやめて
しまいます。仕事とか子育てとか、
色々あるからしょうがないところも
ありますが、またいつでも“作る”
ことを始めたいと思います。な
んなら、それは美術作品じゃなくて
もいいかもしれません。

子育てや仕事を頑張ることだって
創造的な行為だし…もちろん作品で
なければならぬ理由があるんだっ
たら、美術作品を作っていくことも
一つの選択肢だと思います。



ロゴについて

卒業したあとどんな仕事をしていても、生活をしていても、大学で学んだことや、大学の仲間たちと過ごした時間は生かされている。どんな経験も、この先の自分につながっていく、という意味を込めて、「ZAWA+」の文字を一筆書きのようにつなげました。また“人生山あり谷あり”というイメージに合わせ、丸みを帯びたデザインにしました。

ZAWA+ vol.09 秋元 さなえ「私はここにいて、それを見ている」

会期	2026年1月17日（土）～1月28日（水）
時間	10：30～12：00、13：00～17：00（※最終日15時まで）
会場	北海道教育大学岩見沢校 BOX [i-BOX] ＋有明交流プラザ センターホール 岩見沢市有明町南1番地1 JR 岩見沢複合駅舎 有明交流プラザ 2 階 入場無料
企画	北海道教育大学岩見沢校 BOX [i-BOX] 煤田真実／立花優果／尾崎芳子
学生スタッフ	鈴木隆司／萩野蒼彩／八木彩香／和田明日香



―大学で学んだことは今のお仕事に
どう活かしていますか？

坂巻先生は授業の中で、ヨーゼフ・ボイスの社会彫刻の話※9をよくしてくれて、『作品を作ることとは美術の領域じゃなくてもいい』というようなことを仰っていました。意識するならば、『自分で意志を持って社会のためになることを選択して、それに向かって何か創造性を発揮した行動を起こせば、それが一つのアクションで、アートではないか』といったところでしょうか。そういう考え方を話してくれたのが、在学中印象に残っています。

卒業してからどうやって自分が何かを作り上げていくのか、それを考えさせられるゼミだったなあと、今も思います。それで言ったら、アトリエのレッスンや作品制作も、先生が言う社会彫刻に繋がっていたりするのかな、と思います。

自分が地域の中のいち個体として含まれていて、その周辺でどういう輪を作っていくか。行政にアクシヨ

ンをして行う地域活動もあるけれど、私は私一人でやれることが限られているから、私の足元で起こることをやっていくのでいい、と思っています。

―これから美術を学ぶ人に向けて、
メッセージはありますか？

いろいろな方法の“作る”を学ぶ機会を持ってほしいですね。絵を描くこと、彫刻で形を作ること、モノとしての作品が出来上がるこのほかに、関係を作る、場を作る、私を作る…大学は、そういう概念を広げてくれる場所だと思います。今の自分の好きなことを伸ばしつつ、自分の中になかった価値観を受け入れる経験をたくさんして欲しいです。

※9. ドイツの芸術家、ヨーゼフ・ボイス（1921～1986年）が提唱した概念。ボイスは「すべての人間は芸術家である」という主張のもと、既存の芸術の概念を超えて、医学、農業、教育、工業、商業、政治、金融などのあらゆる社会活動が「拡張された芸術概念」に含まれ、すべての人間が社会の形を彫刻する一員として創造力を発揮するべきだと促した。代表的な作品の一つに「七千本の樫の木」（1982～1987年）がある。

